日本児童研究会(日本児童学会)と哲学館(東洋大学)

清水 乞
shimizu tadashi

一　緒論

一・一　元良勇次郎と高島平三郎

先に哲学館（東洋大学）の教育学・心理学の講義担当者を調べた時、高島平三郎（慶応元年―昭和二十一年）の経歴・業績を知る機会があった。特に興味を引いたのは、昭和六年四月三十日と昭和十一年四月二十日の「兼任教員調書」中、高島平三郎の欄にある「心理学概論・本務立正大学・学歴・元良勇次郎に就き哲学を修む」（『東洋大学百年史・資料編Ⅰ・下』・五十二頁、六十九頁）の中の学歴の表記であった。そこで元良と高島との師弟関係を調べてみたところ、元良の著書の著者識語に「本書を出版するに就きては高島平三郎氏は考案の増補字句の修正其他の注意等労を取られたること少からず。故に此処に記して鳴謝すと云う」（『倫理講話』同文館　明治三十三年）とあり、また編者識語には「本書は原著者元良博士の校閲を経たるは勿論、原著の文章に関して少からざる力を尽くされたる高島平三郎君の厳密なる校正を受けたれば、特に記して感謝の意を表す。」（『元良氏倫理書』明治三十五年　成美堂）とある通り、元良の高島に対する強い信頼の情が吐露されており、その前提として、両者の間にある程度の長期にわたる親密な交際があったことを推測することが出来る。一方、人名辞典などによると

「勇次郎が文科大学教授に任命された頃は、心理学専攻の学生は非常に少なかった。その為、勇次郎の赤坂榎町の自宅において、ゼミ形式の研究会が行われることが多かった」と伝えられている。高島は、大学関係者ではないが、この研究会に個人的に出席することを許されていた。時期的には、元良が米国から帰国して、東京帝国大学の教員として「精神物理学」を担当した明治二十二年頃であろう。高島は既に明治二十年に上京して東京高等師範学校附属小学校教授掛補助になり、明治二十三年には学習院に勤めていた。加藤俊之氏（北海道教育大学）によれば、雑誌「児童研究」を高島と共に創刊した松本孝次郎と塚原政次はこの研究会で出会っている。この出会いによって四人の心理学者の結束が生まれ、後に「日本児童学会」が創設されるのである。

一・二　日本児童学会の創設

次に、「児童研究」の創刊、「日本児童学会」創設の経緯を辿りつつ四人の関係を簡単に見ておこう（年次等はすべて加藤俊之「森田正馬と雑誌「児童研究」（「北海道教育大学紀要（教育学科編）」五十五巻・一号）平成六年九月に拠る）。

明治二十三年に心理学者の元良勇次郎、英語学者の神田乃武、社会学者の外山正一、教育学者の高島平三郎等二十一人によって、「日本教育研究会」が創設され、後に児童心理学者の塚原政次、心理学者の松本孝次郎も加わり、明治三十一年には「児童研究所」を創設、その機関誌として月刊誌『児童研究』を創刊。明治三十四年塚原政次がドイツ・アメリカ留学の為に離れたので、明治三十五年に「日本児童学研究会」を組織し、『児童研究』を引き継ぐ。この研究会の会長は元良勇次郎、幹事は榊保三郎、松本孝次郎、高島平三郎、下田次郎の四名であった。更に明治四十年の再編成を経て、明治四十五年五月一日、その第七回総会において名称を「日本児童

学会」と改称、元良勇次郎を会長とし規約を制定、幹事九名、評議員三十名とし、活動の中心として九部門の専科委員会を設けた。ここに総合的に児童の研究を行う「児童学」の学会が誕生した。

他方、明治三十四年、塚原政次は一年先輩の松本孝次郎と共に、元良勇次郎を会長として、「心理学会」を創設した。この「心理学会」の母体となったのは、元良の自宅に帝大卒業生、大学院生などが集まる研究会であった。先にに述べた通り、この研究会に元良に私淑していた高島がいた。ここに元良、高島、松本、塚原の長い繋がりが生まれたのである。

元良勇次郎自身も『児童研究』創刊号の祝辞で、このように述べている。「頃日、教育研究所において児童研究といへる雑誌を発行せんとする挙ありて、高島・塚原・松本の諸氏またこれを賛し、各その専攻にかかわる学説実験を掲記せしむと聞く。これ我が教育社会のために賀すべきことなりとす。何となればこれ我が教育社会の新事業にして将来大いに希望を属すべきものなりと信ずればなり」。

一・三　日本児童学会の構成と目的

加藤敏之「前掲書」に引用されている日本児童学会役員名簿（『児童研究』15巻―12号・大正元年七月一日）によると、会長、幹事（九人）、評議員（三十人）、専科委員九部門（三十五人）、その内訳・心理学（七人）、児童心理学（四人）、教育学（六人）、教育病理学（五人）、教育衛生学（一人）、学校衛生学（二人）、小児科学（六人）、生理学（一人）、特殊教育学（三人）という、総合的な児童研究の陣容である。これに加えて、機関誌として『児童研究』を発行していた。『児童研究』は明治三十一年から昭和十八年まで一巻より四十一巻まで四八五号が発行され、五巻までは教育研究会の発行であるが、明治三十六年の六巻一号からは日本児童研究会の発行である。こ

の論説によると

旧臘日本児童研究会成るや、心理学者は医学者、生理学者と握手し、教育者若しくは実際教育家は社会学者若しくは社会改良家及び人類学者と提携し、是等あらゆる科学の方面より児童を研究せんとするに基礎ここに確立するに至れり。されば本会の機関として本誌は従来の心理的教育研究に加ふるに更に生理的、病理的、人類学的等各種研究を掲載して児童研究の職分を全うせんことを期すべきなり。（前田晶子「『児童研究』に於ける発達思想の形成」一七五頁・引用による）

また明治四十年日本児童研究会の組織替えが行われた年の十巻七号巻頭論文では

向上的には心理学、倫理学、論理学、法学、社会学、宗教学等よりし、向下的には生物学（解剖学、生理学）、文化史等よりし、側面的には動物心理学、人類学等よりし、各科の知識を籍て、以て児童の研究を十分にすることを期すべきなり。（前田晶子「同前」引用による）

上記に挙げた日本児童学会の組織はこの組織替えを経て更に充実された時のものである。

専科委員の専門分野は専科の名称によって見当はつく。会長が心理学専科委員を兼ねていることを始として、幹事九人の中では六人が専科委員を兼ね、評議員三十人の中には、筆者がその履歴を知ることが出来なかった人（八人）があるが、九人が専科委員を兼ねている。履歴が判明した評議員の専門分野は心理学者、教育学者、博

物学者、児童福祉家、社会福祉家、医師（法医学、精神科医）、教育現場の小学校長と多彩であり、役員だけを見ても、前掲の論説や巻頭論文の方針が具現されている。次に、これら役員の内で哲学館・東洋大学と何等かの関係を持った人々、例えば教員として、或は研究会・講習会の講師として関係した人々に就いての考察に移る。

二　哲学館・東洋大学との教育的関係者

以下、十八人の履歴・著作等は、記述を簡潔にするするため、年譜の形式を取ることにした。最初に一、として、哲学館・東洋大学の関係事項を置き、次に二、として、略歴・著作を置いた。一の事項は『東洋大学百年史』の「通史編」（略＝通Ⅰ・頁）、「資料編」（略＝資Ⅰ・頁、資Ⅱ・頁）に拠った。ただ項目の多い人物の場合はこれを省略した場合がある。二の最初は生没年月日である。略歴・著作はインターネットからの情報に、『東洋大学人名録　役員・教職員　戦前編』（東洋大学井上円了記念学術センター　１９９６年３月）、「東京帝国大学一覧・明治十九年―四十五年」、「東京帝国大学医が大学一覧・明治十九年―四十五年」等から加筆した。

二・一　明治年間に哲学館の教員に就任した人

哲学館の館主井上円了は明治二十三年「教育勅語」発布を機に、「国学漢学仏学三科の専門部」開設資金募集のため、その十一月より全国巡講を開始したが、明治二十七年月から二十九年三月まで、巡講を中断している。その理由は「地方旅行を止め終年東京にありて専ら館生の監督、学科の改正に力を尽くし年々課程を進めて数年の後、先きに予定せる専門科を開設せんと」（資Ⅰ上・９２２）するためであった。この成果は明治三十二年一月の「私立哲学館入学案内」に発表された内容であろう。これに依ると学科は正科と専修科とし、正科は中学部

（予科）と高等科（本科）の二部よりなり、更に高等科は教育学部、宗教学部、専修科は漢学科、仏教科の各二部よりなっている。両学部の教育程度と内容は「教育学部は高等師範学校文科に摸準し帝国大学文科を参酌し専ら教育家必須の科目を撰みて学科を組織し、宗教学部の組織は帝国大学文科に摸準し、泰西大学宗教部を参酌したるもの」である。専修科の二科は「本館所定の東洋大学科」の準備としている（資1上・169―170参照）。元良勇次郎及びその弟子である松本孝次郎、塚原政次の相続く就任はこの改正に副ったものであろう。高島平三郎と石川貞吉の両人は清国（中国）からの留学生の増加による新学部設置に伴うものであった（通I・738参照）。なおこれ等の教員は高島平三郎を除いて東京帝国大学及び東京高等師範学校の出身者であり、本務校その他の関係で哲学館の勤務は長短不定期である。

○元良勇次郎、会長・心理学専科委員

一、

明治二十七年二月・「悪の性質」（講演）・哲学館『東洋哲学』（一篇七号）

明治二十八年・哲学館講師（担当科目の記載なし）

八・九月・「人生観に就いて」（講演）・哲学館『東洋哲学』（二篇六・七号）

明治三十一年四月・講演「宗教上内心の経験とは果たして何を謂うか」（於　哲学館宗教会春季大会）

十二月・講演「文明の進歩と制裁の変遷との関係」（於　哲学館東洋哲学会第十四例会）

明治三十五年五月・講演「哲学の変遷と新系統」（於　哲学館同窓会例会）

明治三十六年・哲学館講師（担当科目の記載なし）

二、

生没年・安政五年十一月一日〜大正元年十二月十三日

明治八年・同志社英学塾に入る。ここで心理学（性理学）と出会う。

明治十二年・上京し、津田仙の学農社（明治九年創立）で教鞭をとる。

明治十四年・東京英和学校（青山学院の前身）の設立に参画。

明治十六年・渡米し、ボストン大学で哲学、ジョンズ・ホプキンス大学G・S・ホール教授の下で心理学を学ぶ。

明治十七年・『教育新論』・中近堂

明治二十一年・ジョンズ・ホプキンス大学でPh・Dの学位を得る。

明治二十二年・帰国。東京英和学校教員、帝国大学文科大学にて精神物理学の講義を担当。

外山正一、神田乃武と共に、正則予備校（現在の正則高等学校）を設立し、倫理学を担当する。

『心理学』・金港堂

明治二十三年・帝国大学文科大学教授に就任、心理学・倫理学を担当。

『心理学』・金港堂（重版であるが「緒言」に変更があり、目次が詳細である）

明治二十四年・『倫理問題教授法』・金港堂

明治二十六年・心理学・倫理学・論理学第一講座担当となる（後に第2講座を中島力造が担当した）。日本における近代心理学の礎を築く。

『倫理学』・小野英之助

『修身学』・明治講学会
明治三十年・東京高等師範学校教授・哲学
『心理学』・敬業社
『心理学十回講義』・富山房
『心理学概論』・ヴント氏［他］・富山房
明治三十二年・東京高等師範学校教授・心理学
『応用児童心理学』ベルンハルド・ヘルヰヒ［他］・富山房
明治三十三年・修身教科書調査委員
『教育と宗教との関係』・光融館
『倫理及宗教』・勉強堂書店
『精神物理学講義』・哲学館〔明三十三？〕（哲学館第十二学年度高等教育学科講義録）
『倫理講話』・右文館
明治三十五年・東京高等師範学校教授・倫理
『元良氏倫理書』・成美堂
明治四十年・『心理学綱要』・弘道館
明治四十二年・『心理学通俗講話』．第1、2、4、5輯・心理学通俗講話会・同文館（大正二年）
『論文集』・弘道館
明治四十三年・中島力造等共訳・ホール『青年期の研究』同文館

大正元年・カリエスがもとで死去。

大泉溥解説『日本のこども研究：明治・大正・昭和』２００３より「元良勇次郎の子ども研究」を挙げると、「心理と教育との関係、児童の心情研究に就て、小児心理学、児童心理、注意作用の研究、注意練習ノ実験ニ就テ、低脳児研究と其の教育、低脳児分級教授の可否、児童の自我観念、精神療法に就て」がある。

○高島平三郎、幹事・児童心理学専科委員

一、

明治三十三年六月・講演「児童研究について」（於　哲学館同窓会例会）

明治三十九年・東洋大学日清高等学部師範科講師（心理学・教育学担当）

明治四十年・東洋大学教員（心理学担当）

明治四十二年一月・講演「理想の対象」（於　東洋大学仏教青年会）

明治四十三年二月・講演「才に人乎徳の人乎」（於　東洋大学哲学会）

大正二年四月・東洋大学講師（教育担当）

大正六年十一月・講演「興国民の資格」（於　東洋大学創立三十周年記念講演会）

大正八年・東洋大学協議員

大正十年四月・東洋大学専門学部文化学科教員（心理学担当）

東洋大学専門学部社会事業科教員（心理学・児童学担当）

東洋大学大学部印度哲学倫理学科教員（心理学担当）
十一月・東洋大学教授（教育学担当）
昭和二年・東洋大学大学部印度哲学倫理学科予科教員（心理及論理担当）（資Ⅰ上・259）
昭和四年・東洋大学学部教員（心理学概論担当）
昭和五年十一月・講演「宗教意識の要素」（於　東洋大学心理学会）
十月・東洋大学法政経済学会賛助員
昭和六年四月・東洋大学兼任教員（心理学概論担当）
昭和八年・東洋大学文学部教授（心理学概論担当）
昭和九年七月・東洋大学財団・維持員
昭和十一年四月・東洋大学兼任教員（心理学概論担当）
東洋大学専門部兼任教員（教育担当）
昭和十五年四月・東洋大学文学部（特殊心理学［児童心理］担当）
昭和十七年五月・東洋大学文学部哲学科（心理学担当）
昭和十九年・十一月・第十三代東洋大学学長
昭和二十年五月・東洋大学学長辞任

二、

生没年・慶応元年十月一日～昭和二十一年二月十五日

本郷西片福山藩邸に生れる。

明治十一年・広島県立広島師範学校福山分校入学、備後浚明館で漢文詩を学ぶ。
明治十四年四月・神村小学校須江分校教員
明治年三月・松永小学校教員、金江町金見小学校教員、漢学、数学、英語などを学ぶ。
明治十七年九月・金江町金見小学校校長
明治二十年三月・広島県師範学校訓導
十月・東京高等師範学校附属小学校教授掛補助
明治二十三年九月・学習院助教授
明治二十六年・『内国教育史要』・普及舎
『心理綱要』・普及舎
明治二十九年九月・長野県師範学校傭教師
元良勇次郎、武田乃武、外山正一と共に「日本教育研究会」（後の「児童研究所」→「日本児童研究会」→「日本児童学会」）を創設（前述）。
明治三十一年十一月三日
松本孝次郎、塚原政治と共に「児童研究所」の機関紙『児童研究』を創刊（前述）。
四月・成城学校教師
明治三十三年三月・日本体育会教師
『教育的心理学』・同文館
明治三十四年十一月・『新撰教育学講義』・帝国通信講習会

日本女子大学校教授（児童心理学担当）

明治三十五年・日本体育会体操学校校長

塚原政治のアメリカ留学を期に、松本孝次郎と共に「日本児童研究会」を組織し、元良勇次郎を会長とする（前述）。

明治三十六年四月・『教育漫筆』・元々堂

明治三十七年・宏文学院（清国留日師範生教育のため嘉納治五郎が創設）教師、心理学担当

十月・体操遊戯取調委員（文部省、委員長は沢柳政太郎）

『体育原理』・育英舎

明治三十八年・『女子新教育学』・啓成社

明治三十九年・日蓮宗大学（現立正大学）教授（教育学担当）

『小学校体操遊戯講習会科外講演集』・体育研究会

明治四十年・『体操及遊戯法精義.前編 体操の部』・富永岩太郎と共著・同文館

明治四十二年・『児童心理講話』・広文堂

明治四十三年・『體育之理論及實際』（分担執筆）改訂・國光印刷

明治四十四年・『女の心』・洛陽堂

『教育に応用したる児童研究』・洛陽堂

明治四十五年三月・日本女子大学校教授辞職

『心理百話』・洛陽堂

大正三年・『修養二十講』・磯部甲陽堂
『児童之精神及身体』・日本学術普及会
『心理学上より観たる日蓮上人』・洛陽堂
大正十年・『家庭に於ける児童教育』・大日本児童協会
大正十五年四月・女子高等学園園長
七月・日本少年団支部代表として万国少年団連盟会議（開催地スイス）に出席。
昭和二年四月・東京立正中等高等学校校長（初代）、誠之舎舎監
昭和三年・五年・教育視察のため渡米（文部省嘱託）。

○石川貞吉、評議員
一、
明治三十九年七月・東洋大学日清高等学部警務科講師・法医学担当（警視庁勤務　医学士）――（資Ⅰ上・276）
二、
生没年・不詳
明治二十九年七月・東京帝国大学医科大学卒業。

○吉田熊次、評議員・教育学専科委員
一、

明治三十三年九月・哲学館専任教員・倫理・教育担当。翌年六月文部省修身科教科書起草委員就任のため、辞職。
明治三十四年五月・講演「所謂心教育学とは何ぞや」哲学館同窓会例会（於哲学館講堂）。
明治三十六年・哲学館大学講師（担当科目記載なし）。
昭和二年七月・東洋大学夏期大学講師・「最近の教育問題」。
昭和四年九月・大学部印度哲学倫理学科教授・教育学担当。
専門部倫理学教育学科教授・教育学担当。
昭和四年四月・女子国語漢文講習会講師・教育学・国民道徳担当（この講習会は昭和七年五月に廃止）。
昭和五年・専門部専修科・倫理学東洋文学科乙第一部（昭和六年四月以降は倫理学東洋文学科第一部）教員・教育行政・教育学担当。
専門部大学部支那哲学東洋文学科教員・教育学担当。
東洋大学法政経済学会・賛助員。
昭和六年・東洋大学兼任教員・教育学担当（本務校東京帝国大学）。
昭和八年度・文学部教授・教育学概論・教育学担当。
日本精神研究会・顧問。
昭和九年・東洋大学財団・維持員。
昭和十一年・東洋大学専任教員。
東洋大学専門部兼任教員。

昭和十一年十一月・創立五十周年記念東洋大学基金部・委員。
昭和十四年・東洋大学学術研究会（会長・大倉邦彦）委員長。
昭和十五年・論文「日本教育学の性格」『東洋大学紀要』第一輯。
昭和十六年六月・東洋大学護国会（十九年解散）・総務本部長・理事。
昭和十九年・東洋大学報国団・研修本部長・理事（前期）。
昭和二十年・東洋大学文学部東洋哲学科・古典学科（専攻科）教授。
昭和二十年五月十六日―七月三十一日・第十三代学長高島平三郎辞職に伴う東洋大学学長代理。
昭和二十一年四月・東洋大学専門部歴史科教員・教育学・教育史担当。
十一月・東洋大学戦災復興委員会・実行委員。

二、

生没年・明治七年二月二十七日～昭和三十九年七月十五日
明治三十三年・東京帝大文科大学卒業。
明治三十六年・三ヵ年間、倫理学研究のため独仏に留学。
明治四十一年・東京帝国大学文科大学助教授・教育学・教育学講座分担。東京女高師・東京高師教授。
大正五年・東京帝大教授。社会的教育学をとなえ、ドイツ実験教育学を紹介して実証的教育学への道をひらいた。
明治三十四年・『ベルゲマン氏社会的教育学及進化的倫理学』
明治三十七年・『社会的教育学講義』、『社会的倫理学』

明治四十二年・『実験教育学の進歩』
明治四十二年・『系統的教育学』
○呉秀三、評議員・教育病理学専科委員
一、
明治二十八年・哲学館講師（資Ⅰ下・9）　哲学館哲学研究会特別会員（通Ⅰ・166）
二、
生没年・元治二年二月十七日～昭和七年三月二十六日。
精神科医。広島藩医呉黄石の三男として江戸・青山（現在の東京都港区）に生まれた。母・せきは箕作阮甫の長女。統計学者の呉文聰は兄。
明治二十四年・東京大学帝国大学医科大学卒業。
明治三十年・三ヵ年間、精神病学研究のため独墺に留学。
明治三十二年・留学中東京帝国大学医科大学助教授。
明治三十四年・東京帝国大学医科大学教授・精神病学講座担任。初代松沢病院長。
明治三十五年・日本神経学会（日本精神神経学会の前身）創設。精神病者慈善救治会（民間慈善団体）の提唱・設立。
大正元年・『我邦に於ける精神病に関する最近の施設』
大正七年・『精神病者私宅監置実況及び其統計的観察』
また医学史にも深い関心を持ち、シーボルトや華岡青洲、外祖父・箕作阮甫等の伝記を著した。

○塚原政次、児童心理学専科委員

一、

明治三十二年・哲学館定時出席講師（哲学）

明治三十三年・哲学館講師継続

明治三十四年・哲学館講師（心理学・論理学）

明治三十六年・哲学館大学職員（担当科目記載なし）

二、

生没年・明治五年～昭和二十一年

兵庫県に生まれる

明治三十年・東京帝国大学哲学科卒業。研究科進学、研究題目は「児童心理学」。

明治三十一年・『教育心理学』・金港堂

明治三十二年・フリードリッヒ・キルヒネル『幾氏教育学』（訳述）・富山房

明治三十三年・『ルボン氏民族心理学』（解説）・育成会

明治三十四年・心理学研究のため国費留学生として米・独に留学。

『通俗哲学講義録』（論理学）・哲学館

『精神と脳髄』（哲学館夏季講習会・科外）

スクリプチュア『実験新心理学』（訳述）上下・富山房

『スタウト氏心理学』（解説）・育成会
ラッド氏心理学講演・富山房
明治三十六年・『生理的心理学』・同文館
明治四十三年・『青年心理』・金港堂
大正十五年・『児童の心理及教育』・明治図書
昭和九年八月～昭和二十年六月・第三代広島文理大学学長。

○松本孝次郎、児童心理学専科委員

一、

明治二十九年九月・哲学館嘱託講師・心理学担当
明治三十二年・哲学館明治三十二年度定時出席講師・教育・哲学担当
明治三十三年・哲学館教員・嘱託・倫理及教育担当
明治三十四年・哲学館講師・応用心理学担当
明治三十年四月二十五日・講演「輓近の心理学に就きて」・哲学館教育学会例会
十月三十一日・講演「応用心理学に就きて」哲学館教育会例会
明治三十六年・哲学館大学講師
明治三十七年四月一日・哲学館大学井上円了学長より謝恩状を受ける（5年以上勤務）
講話「戦時に際して家庭に望む」（『修身教会雑誌』第2号）

二、

生没年・明治三年～昭和七年

明治二十六年七月・東京帝国大学文科大学哲学科入学。

明治二十九年七月・卒業、研究科に進学し、感覚論の原理を研究する。

明治三十年七月・東京帝国大学より心理研究の補助を嘱託される。

明治三十一年七月・東京帝国大学文科大学講師を嘱託される。

『児童心理学講義』・松栄堂

『普通心理講義』・岡崎屋書店

『美学』（哲学館第10学年度高等教育学科講義録）

『美学講義』（哲学館第10学年度高等宗教学科講義録）

『教育学心理学衛生学講義』

『通俗児童学講義・第1集』・フレベル会幼児発育研究組合

フレデリック・トレシイ『児童心理学』・普及舎

『心理学講義』

明治三十三年・『教育学原理』（哲学館第11学年度高等教育学科講義録）

『ティチェナー氏心理学綱要』・東京専門学校出版部（名著綱要文学教育科〔1〕）

『チーヘン氏生理的心理学』（解説）育成会

明治三十三～三十四年・育成会で心理学を研究。

明治三十四年・『児童研究講演速記録』・名古屋金城教育会
チーヘン『生理的心理学』増補・成美堂
『バルドヰン氏精神発達之説明』・育成会
『児童研究』・帝国通信講習会
『実際的児童学』・同文館
明治三十五年九月・早稲田大学文学部で特殊教育・教育法令を講じる。
東京高等師範学校教授・心理学、論理学、教育学、児童研究担当
『教育学新教科書』・小西重直と共著・普及舎
『心理学新教科書』・福来友吉と共著・普及舎
『新編教育学』・成美堂
『新編心理学』・成美堂
明治三十六年・『家庭教育』・金昌堂
『普通児童心理学』・成美堂
明治三十八年・『児童心理学』・博文館
『児童心理学講義』・女子修養会
明治三十九年・南京両江師範学堂教員（東京高等師範教授を休職）。
『教育学要義』・啓成社
『家庭に於ける児童教育』・国光社

明治四十四年・辛亥革命のため失職、蔵書等研究資料を失う。
明治四十五年・帰国、学界より引退。

○波多野貞之助

一、
哲学館夏期講習会講師・明治四十年正科・修身教授法（通Ⅰ・３１３）

二、
生没年・元治元年～大正十二年
明治十七年・東京高等師範学校中学師範科卒業
明治二十五年・三ヵ年、師範学科及実業補習学校の事項研究のためドイツに留学。
明治三十年・東京高等師範学校教授・教育学担当

二・二　大正年間に東洋大学の教員に就任した人。

東洋大学は大正十年学制を改革して、大学部と専門部の名称変更を行った。特に専門部は専門学部と改称し、文科学科と社会事業学科とを新設した。この新設趣旨に依れば、文化学科は「哲学を中心として文芸及社会問題を研究対象となし、真に新文化の意義を領得せしむる」ため、社会事業学科は「通学者の便宜のために本科に限り夜学となし、事実上殆んど本邦に欠如せる社会事業に実際的人物養成の目的を達せん」（通Ⅰ・７８７）がため、とある。したがって、ここに挙げる五人すべてが大正十年に就任している。文科学科は速水滉が心理学を担

当している。社会事業学科は冨士川游を学科長に迎え、彼の理念と構想の下に学科編成が行われた。つまり、社会事業は「我々人類が社会的生活をなすに方りて現はるゝ所の病的現象（欠陥）を予防し及び治療するがために施す所の諸般の方法」と規定され、この病的現象を生み出す個体の本態を知るには、主として「生理学、心理学、児童学、変態心理学、犯罪心理学、刑事人類学、教育病理学、社会心理学、民族心理学、衛生学等」の知識が必要であるとする（通Ⅰ・８０１参照）。当然、この構想に副って各自が科目を担当している。この学科には、既に明治三十九年、日清高等学部師範科の教員を経験したことのある、高島平三郎が心理学担当として参加した。冨士川と高島は同年生まれ、同郷者であり、共に仏教信者（冨士川は親鸞、高島は日蓮）であった。日本児童学会以外でも、両者は大日本仏教慈善会財団設立の社会事業研究所の講師を務めたことがある。この研究所は教育機関ででもあり、一年間、青年を教育して社会に送り出していて、大正八・九年に冨士川（児童心理学と教育病理学担当）、大正九年に高島（児童心理学担当）が講師であった。［ちなみに日本児童学会の評議員であった留岡幸助（部落改善担当）、小河滋次郎（災害救護担当）、棚橋源太郎（風化事業・社会教育担当）がこの研究会の講師に名を連ねている。］

○倉橋惣三　幹事・児童心理学専科委員

一、

東洋大学専門学部社会事業科講師・大正十年・児童学担当（通Ⅰ・８０４）

二、

生没年・明治十五年十二月二十八日～昭和三十年四月二十一日

明治三十九年・東京帝国大学文科大学哲学科卒業。同大学院児童心理学終了。
明治四十三年・東京女子高等師範学校講師。研究会フレーベル会の機関誌「婦人と子ども」の編集を行った。
大正一年・幼児への読み聞かせを主目的とした『幼児に聞かせるお話』を出版した内田老鶴圃の三女のトクと結婚。
大正二年・東京女子高等師範学校講師
大正六年・教授に就任。同年、東京女子高等師範学校付属幼稚園主事となり、幼稚園教育の育成と改善に努力した。
子供の自発と心情を重視する自然主義的児童観によって、明治以来の形式的な恩物主義（フレーベル主義）を排し自由遊びを重んじた。子供の生活とルールに根ざした〈自己充実〉を目指し、そのための〈誘導〉を保育の真諦とした。
大正七年・フレーベル会を日本幼稚園協会と改名し、
大正八年・「婦人と子ども」は「幼児教育」と改名した（十二年より「幼児の教育」）。
大正八年～十一年・欧米留学。この間、世界児童保護会議に出席。帰国後は「コドモノクニ」の編集に従事。
大正十二年・お茶の水人形座の名で幼児のための人形芝居をはじめ、
大正十三年・日比谷公園で児童遊園を監修した。また、駄菓子屋の調査や紙芝居を研究する。
昭和十三年・日本教育紙芝居協会設立時の理事を務めた。
昭和十二年～昭和十四年・皇太子（今上天皇）の〝お遊び相手〟として東宮仮御所、葉山御用邸に出仕し、
昭和十四年～十五年・には常陸宮の〝お遊び相手〟として青山御殿、那須御用邸などに出仕した。

日本保育学会を創設して初代会長に就任。没するまで会長の職にあった。
わが国の〝幼児教育の父〟、〝日本のフレーベル〟と呼ばれた。

主な著書

大正十五年・『幼稚園雑草』
昭和二年・『キンダーブック』、『社会的児童保護概論』
昭和四年・『児童保護の教育原理』
昭和六年・『就学前の教育』、『日本幼稚園史』
昭和十一年・『育ての心』
昭和十四年・『フレーベル』
昭和二十九年・『子供賛歌』

○三宅鉱一、幹事・教育病理学専科委員

一、

大正十年・東洋大学専門学部社会事業科教員・変態心理学、精神検査法担当（通Ｉ・８０３・資Ｉ下・１７）

二、

生没年・明治九年三月二十四日～昭和二十九年七月六日
大正～昭和時代の精神医学者　三宅秀（ひいず）の長男。
明治三十五年・東京帝大医科大学卒業。

明治四十年～四十一年精神病学講師、四十二年～四十三年助教授を経て、
大正十四年・東京帝大の教授となり、東京府立松沢病院長をかねる。
昭和十一年・同大医学部に脳研究所を開設し、十七年まで所長をつとめた。

○速見滉、評議員・心理学専科委員

一、

大正十年・東洋大学専門学部文化学科教員・心理学担当（通Ⅰ・791、資Ⅰ下・16）

二、

生没年・明治九年十二月二十三日～昭和十八年六月二十七日

明治三十年・東京帝国大学文科大学哲学科入学

明治三十三年七月・同上卒業。旧制山口高、一高などの教授をへて、

大正十三年・京城帝大教授（のち総長となる）。著作・「論理学」、「現代の心理学」など。

○冨士川游、評議員・学校衛生学専科委員

一、

大正七年二月十七日・講演「蘭学の濫觴」・東洋大学学芸講演会

大正八年・第四代境野哲学長による「東洋大学・大学部拡張計画」相談役

東洋大学協議会（学長の協議機関）員

大正十年・専門部社会事業科（夜間）学科長、「教育病理学・人種衛生学・保護教育・人体計測法」を担当。社会事業科は昭和三年社会教育社会事業科と改称。
大正十二年二月・東洋大学昇格委員会・教授側委員長。
昭和二年・第六代学長中島徳蔵による第二次東洋大学昇格運動に伴う「昇格部」実務役員（教授側基金課員）
昭和四年五月・専門部社会教育社会事業科科長辞任。

二、

生没年・慶應元年五月十一日～昭和十五年十一月六日
明治二十年・広島医学校（現・広島大学医学部）卒業。上京し明治生命保険の保険医となる。傍ら中外医事新報社に入社。社用で全国各地を旅する機会に恵まれ寸暇を見て各地の先哲、名医の遺著や文献の発見に努めた。また所属する出版社から多数の医学雑誌を創刊、呉秀三らとも親しく交わり医学史に興味を持つ。
明治二十二年・ドイツ・イエナ大学に留学。神経病学および理学療法を研究、ドクトル・メディチーネの学位を取得。また性科学、教育病理学、教育治療学、犯罪人類学に触れる。
明治二十三年・帰国後、東京日本橋の中洲養生院の内科医長となる。
明治二十三年・第1回日本医学会では記録幹事を務める。
明治二十六年・この頃から日本医史学という前人未踏の分野に挑む。
明治二十八年・呉秀三と医史社を興す。
明治三十年・呉秀三ら芸備医学会を設立し広島地方の医学水準向上に寄与。

明治三十七年・『日本医学史』
明治四十五年・『日本医学史』により帝国学士院（日本学士院）恩賜賞を受賞した。
『日本疾病史』
大正三年・文学博士の称号を得る。
大正四年・この年設立された日本児童学会附属児童相談所創設などにも関与した。
『日本疾病史』により医学博士の称号を得る。
大正十一年・鎌倉中学校（現・鎌倉学園高等学校）初代校長。
大正十三年・『異常児童』
大正十四年・大阪プラトン社の研究機関「中山文化研究所」の所長に招かれ、この中に婦人精神文化研究会を開設し書籍の発行の他、女性文化研究・児童教養研究等を行う。
大正十五年・この年開館した浅野図書館（現・広島市立中央図書館）建設にあたり高楠順次郎らと共に顧問として尽力。
昭和二年・日本医史学会を設立。

○寺田精一、評議員
一、
大正十年・東洋大学専門学部社会事業科教員・変態心理学、犯罪心理学担当（通Ⅰ・８０３・資Ⅰ下・１７）
二、

生没年・明治十七年五月十三日～大正十一年九月四日。
東京の巣鴨（すがも）刑務所で受刑者を調査し、犯罪心理を研究した。警察講習所、日本女子大、天台宗大（現大正大）の講師。児童教育雑誌「トモダチ」を発行した。愛知県出身。東京帝大卒。著作・「犯罪心理講話」「児童の悪癖」など。

二・三　講演会等の講師

講演会・研究会の講師は下田次郎（東京女高師名誉教授・教育学）、片山国嘉（東京帝大医科大学教授・教育病理学）、棚橋源太郎（東京高師教授・評議員）、大瀬甚太郎（東京高師教授・教育学）、谷本富（東京高師教授・教育学）の五人である。（　）内は講演時の職業と日本児童学会の専門科である。講演の演題は各人の専門分野から選ばれている。棚橋源太郎の演題は不詳であるが、講演の場所から推測すれば、博物学関係であろう。これ等講師の人々と日本児童学会との関係を殊更強調する必要はないかも知れないが、ここに紹介しておく。

○下田次郎、幹事・教育学専科委員

一、

明治三十六年六月六日・講演「独仏英米諸国の実際教育について」哲学館同窓会例会、於　哲学館講堂（通Ⅰ・430）

二、

生没年・明治五年四月十三日～昭和十三年三月二十四日。

明治二十六年・東京帝国大学文科大学哲学科に入学。
明治二十九年・東京帝国大学文科大学哲学科を卒業、研究科に進学「教育の心理的基礎」について研究した。
明治三十二年・東京女子高等師範学校教授。
明治三十二年・三ヵ年、教育学・女子教育法研究のため独英米に留学。
帰朝後「女子教育研究の基礎としての性の研究」で文学博士の学位を得る。
昭和十二年・退官（名誉教授）まで教鞭をとる。修身教育を担当。
明治三十七年・『女子教育』は、日本で最初の女子の身体及び精神に関する系統的説述といわれている。
大日本女子教育会を設立し、その機関誌として「女子教育」を十五年間にわたり発行した。
明治三十九年・『教育思想の変遷』
明治四十四年・『近世教育史』

○片山国嘉、評議員・教育病理学専科委員
一、
明治三十四年・講演「心病と精神病との区別」・哲学館釈尊降誕会、於　哲学館講堂（通Ⅰ・２０９）
二、
生没年・安政二年七月七日～昭和六年十一月
明治十二年・東京大学医科大学卒業。
明治十六年・東京大学医科大学生理学助教授。

明治十七年・法医学研究のため四ヵ年オーストリヤ、ドイツに留学。
明治二十一年・教授に就任、裁判医学と衛生学を担当。翌年わが国最初の法医学講座を開講した。
三十五年・清（中国）・韓両国との医学交流のため同仁会を設立。晩年は禁酒運動につくした。著作・「最新法医学講義」など。

○棚橋源太郎、評議員

一、

大正九年一月三十一日・東洋大学救済学会（社会事業学会の前身）特別出張講演会講師、於　東京教育博物館

（通Ⅰ・８０５）

二、

生没年・明治二年～昭和三十六年

美濃国方県郡木田村（岐阜市）南柿ヶ瀬に生まれる。

明治十八年・岐阜県華陽学校師範部へ入学。
明治二十二年・二十歳で同校を卒業後、同校の付属小学校に勤務。
明治二十五年・東京高等師範学校の博物科に入学。
明治二十八年・三月・高等師範学校博物科を卒業。
明治二十八年・郷土岐阜の尋常師範学校教諭として着任。
明治三十年・東京高等師範学校付属小学校に勤務。

明治三十五年・附属小学校第一部主任・郷土科、理科、英語・訓導。
明治三十六年・東京高等師範学校助教授・教育。
明治三十七年・教授・教育。
付属教育博物館主事。
明治四十二年・博物学研究のためドイツ、アメリカへ二年間留学。
大正十三年・退官。
大正十四年・ヨーロッパへ博物館調査。
在欧中は精力的に活動し、後にローマ法王よりコマンドール勲章を贈られる。
大正十五年・帰国し、日本赤十字参考館（後の赤十字博物館）開館に取り組み、以後二十年間同館に勤務。
昭和六年・設立に尽力した東京科学博物館が上野に開館。
昭和二十六年・博物館法が制定された後、「日本博物館協会」の専務理事を退職し、顧問となる。
昭和二十八年・立教大学の講師として博物館学の講義を行い、以後七年間、一回の休みもなく、二時間の講義を続ける。
昭和三十三年・社会教育への功労として藍綬褒章を授与される。
昭和三十四年・国際博物館協会の名誉会員に推挙され、世界で三人目の栄誉を受ける。

著書

『実用教授法』　金港堂　明治三十六年
『眼に訴へる教育機関』　宝文館　昭和五年

『郷土博物館』 刀江書院　昭和七年
『世界の博物館』 大日本雄弁会講談社　昭和二十二年
『博物館学綱要』 理想社 昭和二十五年
『博物館教育』 創元社　昭和二十八年
『博物館・美術館史』 長谷川書房　昭和三十七年

○大瀬甚太郎

一、

明治三十一年十一月二十日・講演「欧州教育の現況〔6の二・三〕哲学館教育学会第十四例会、於　哲学館第一教室（通Ⅰ・319）

二、

生没年・慶応元年十二月二十四日～昭和十九年五月二十九日

石川県金沢市生まれ。加賀藩士族・大瀬直温の子。上京後、進文学舎、東京大学予備門を経て、明治十九年・帝国大学文科大学哲学科に入学。

明治二十二年七月・卒業後、同研究科に進学し心理学を専攻する。

明治二十四年・第五高等中学校に赴任（校長は嘉納治五郎）。在職中に文部省留学生に任じられ、明治二十六年・三カ年教育学研究のためドイツ（二年間）、フランス（一年間）に留学。

明治三十一年一月・高等師範学校教授に任じられる。

昭和四年・急逝した三宅米吉の後を受けて、第二代の東京文理科大学学長となる。
昭和九年・定年退官。

○谷本富

一、

明治二十八年一月二日・講演「東洋教育の研究に就きて」〔講演『東洋哲学』第一編第十一号〕（通Ⅰ・185）

明治三十一年五月一日・講演「教育学修業者の着眼点〔5の六〕」・哲学館教育学会第十例会、於哲学館（通Ⅰ・318）

二、

生没年・慶応三年十月十七日―昭和二十一年二月一日

香川県高松市生まれ。高松医学校卒。

明治二十二年・東京帝国大学文科大学特約生教育学科において御雇教師ハウスクネヒトからヘルバルト教育学を学んだ（二十四年七月卒業）。山口高等中学校に赴任。

明治二十七年・東京高等師範学校教授（日高真実の後任）。

明治三十一年・『将来の教育学』

明治三十三年・三年間、教育学研究のため英独仏に留学。帰国後、ヘルバルト一辺倒から転じて、新教育を強く提唱する。

明治三十九年・『新教育学講義』（留学の成果）。

京都帝国大学教授。

明治四十五年九月明治天皇の崩御に際して、乃木希典が後を追って殉死した事件に対して、時代錯誤の振る舞いと毎日新聞に発表し、世間から非難を浴びる。

大正二年・大谷大学・神戸高等商業学校（兼務校）を辞任。

八月、京都帝国大学辞職。

三　小括

以上に紹介した人々は、先に述べて通り、帝国大学や高等師範に務めており哲学館・東洋大学の勤務は断続的で、各人別々の場合が多かった。しかし教育の場に於ける種蒔きは系統的に継続されていた事であろう。これ等の人々の具体的教育活動を個々にわたり跡ずけることは困難であるが、総合的に、つまり理念の継承として跡づけることは可能である。

例えば、東洋大学が新制大学として発足した後の在り方は、『部局史編』（『東洋大学百年史』の一冊）を繙けば、各部局の執筆者の言葉から明らかであろう。先ず、教育学科の冒頭部に「（前略）よく指摘されるように創立者は当初から学校以外の場における教育、とりわけ社会教育の重要性を認識し、自らもその晩年「修身教会」を組織して社会教育的教育活動に従事した。この視点を承けてか、社会教育、社会事業等に関する科目の設置も古く、とりわけ大正年間（大正一〇年以降）専門部に社会教育・社会事業科を置いている（後略）」（部局編・１０３）と回顧し、「通常の学校教育のみにとどまらず、家庭や社会での教育や身心に障害をもつ児童の教育（養護学校教諭の養成）などに目をむけた」（同前・１０６）教育学科を構想している。また社会学部の社会福祉学

専攻の節に於いても、井上円了の教育理念に基づく明治四十五年の学科改正より説き起こし、「大正一〇（１９２１）年には、夜間ではあったが専門学校令にもとづく社会事業科が成立している。これは三ヵ年間の専門教育課程による学科の設置で、当時のわが国における社会事業教育の点からみれば、画期的な出来ごとであった。この社会事業科の設置を企画・実施したのは時の学長境野哲であった」。「社会事業科は、東洋哲学なり、仏教思想を社会事業実践のバックボーンとしながら、広く科学的研究と結合させて社会事業教育を推進したものと思われる」（同前・３２３）、と同様の回顧談が冒頭に置かれている。この両学科の専門教育課程表の撰択科目に理念が継承され、具現されていることを見ることが出来よう。日本児童学会の九専科と対応する専門科目を挙げると、

教育学科・教育学概論、教育心理学〔以上必修科目〕、児童心理学、小児科学、精神衛生〔以上撰択科目〕（同前・１０７）

社会福祉学科では科目名として対応する科目はないが、内容的に対応する科目は、社会教育、精神分析および療法、医学知識、社会病理学〔以上専門・撰択科目〕（同前・３２３）

最後に大学附置機関である「児童相談室」の活動を挙げておきたい。児童相談室は昭和三十九年大学附置機関となったのであるが、当初、四課題―①障害児童に関する事項、②問題（非行）児に関する事項、③環境（親・社会・経済的問題を含む）に問題のある児童に関する事項、④児童相談・教育相談に関する事項を設定して、研究活動が行われた。この成果の一部として、冨士川游の人物研究である「昭和六十一年度東洋大学特別研究―『東洋大学における社会事業教育の歴史的研究と社会事業史上の意義』―研究代表者・山下袈裟男他」（同前・８８０）がある。